

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名

劉 善鈺

論 文 題 目

連体修飾用法における日本語の形容詞・連体詞「Xい」と「Xな」の使い分け
—大規模コーパスに基づく計量的研究—

論文審査担当者

主 査

名古屋大学 教授 藤村 逸子

委員 名古屋大学 教授 木下 徹

委員 名古屋大学 准教授 加藤 高志

論文審査の結果の要旨

1. 論文の概要と構成

本論文は、日本語の形容詞および連体詞が名詞を修飾する場合に見られる「い」と「な」の交替（たとえば、「大きい声」と「大きな声」）を研究対象とし、コーパス言語学の手法により、レジスターと時代の異なる種々のコーパスから実例を採取し、その使用の傾向を計量的に分析し、使い分けの要因を明らかにしようとしたものである。使用したコーパスは、現代日本語の小説、新聞、雑誌、インターネット上の質疑応答、会議議事録、自然会話、及び日本語の書き言葉の変動期（1895年-1925年）に出版された雑誌である。具体的に取り扱ったのは、現代語の共時的分析では [オオキい・オオキな] [チイさい・チイサな] [オカしい・オカシな] [アタタかい・アタタカナ] [コマかい・コマカナ] [ヤワラかい・ヤワラカナ] の6組の語であり、通時的分析においては、「オオキ」と「チイサ」のみを扱った。なお、ここでのカタカナ表記は、それぞれの語幹のレンマを示しており、実際には形態上・表記上のバリエーションを含めて対象としている。

本論文は8章で構成されている。

第1章では、本研究の位置づけ、目的と課題、研究方法と対象、論文の構成を述べている。

第2章では、形容詞と連体修飾用法全般に関する先行研究を概観した後、本論文で扱う「い」と「な」の現代日本語における使い分けを共時的観点から考察した主な先行研究を紹介し、その問題点を指摘している。

第3章では本研究の方法論を扱っている。すなわち、使用したコーパスの詳細と、コーパスから「Xい」と「Xな」の実例を抽出する手法を紹介し、本研究のデータベースの構築作業を説明している。コーパスは、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』所収のサブコーパスである『Yahoo!知恵袋』、『国会会議録』、『雑誌』、『新聞』、並びに『新潮文庫の100冊』、『BTSJによる日本語話し言葉コーパス』、『名大会話コーパス』、『太陽コーパス』、『近代女性雑誌コーパス』の計9種のコーパスであり、分析対象の用例数は14,188例である。

第4章では、現代小説のコーパス（『新潮文庫の100冊』のうち1950年以降に出版されたもの）を用いて、「い」と「な」の使い分けの要因を、語の種類、統語的役割、意味などの観点から多角的に分析している。顕著な要因として、形容詞・連体詞の種類それ自体（い形容詞とな形容詞のペアでは [オオキい・オオキな] [チイさい・チイサな] [オカしい・オカシな] では、「な」が好まれ、い形容詞と連体詞のペアでは [アタタかい・アタタカナ] [コマかい・コマカナ] [ヤワラかい・ヤワラカナ] では「い」が好まれる傾向がある）およびそれらが修飾節において述語機能（「体が大きい男」）を果たすか否か、述語機能を果たす場合の主語助詞の形態（「が」か「の」か）などの点を指摘している。

第5章では、「い」と「な」の使い分けと言語使用域（レジスター）との関係に注目し、共時的観点から、レジスターの異なる種々のコーパスを用いて分析している。「い」の使用は改まり度の低い「自然会話」で最も多く、改まり度の高い書き言葉『新聞』、『雑誌』、『会議』で「な」が多いことが明らかにされている。また、これと関連して和語には「い」が、漢語に

論文審査の結果の要旨

は「な」が使用されやすいことも指摘されている。

第6章では、第4章と第5章の分析結果をまとめ、現代日本語における「Xい」と「Xな」の使い分けの基準を提示している。

第7章では、第6章で提示した基準の内、語彙項目による「い」と「な」出現傾向の違いに注目し、特に使用頻度の高い「オオキ」と「チイサ」を対象とし（「オオキ」は「な」と、「チイサ」は「い」と共起しやすい傾向が見られる）、その理由を語形の歴史の変遷に求めて、日本語書き言葉の変動期である近代語コーパスに基づいて1895年から1925年に至る変化を観察している。「オオキ」では「な（なる）」の使用が1885年以来、常に圧倒的優位であるが、徐々に「い」の使用が増加してくる。「チイサ」では「い（き）」と「な（なる）」の使用が比較的拮抗している中で、徐々に「な」の使用が増加している。こうして、現代語での使用は、歴史的变化の延長線上にあることを浮かび上がらせている。

第8章は終章として、本研究の主張をまとめ、日本語学への示唆、及び今後の課題について述べている。

以上の分析から、筆者は検討した6組の語の全てについて、「い」と「な」の使用の基準として次の提案を行った。また、語彙項目にはそれぞれ文法的特徴があることも示した。

- ① 連体節内の機能：述語機能あり vs 述語機能なし
- ② レジスター：インフォーマル vs フォーマル
- ③ 被修飾名詞の種類：形式名詞 vs 実質名詞
- ④ 述語機能がある場合の主語助詞：「が」 vs 「の」
- ⑤ 被修飾名詞の語種：和語 vs 漢語

2. 評価

研究課題とした問題は日本語の基礎的言語現象であるにも関わらず、先行研究は少なく、研究が進んでいるとは言い難い対象である。先行研究の問題点としては、主張に矛盾が存在すること、「大きい」、「大きな」、「小さい」、「小さな」の4語以外はほとんど検討対象になっていないこと、データは研究者自らの内省による分析か、書き言葉のみに基づいていて、話し言葉に関するものがないこと、通時的な観点から取り扱ったものがないことなどが挙げられる。このような研究状況である理由としては、この問題には多くの要因が関わっているにも関わらず、従来の方法では方法論的な制約のために多変量的な分析をすることが困難であったためと考えられる。本研究は適切に定義された種々のコーパスを用いることでこの制約を克服し、多数の例を観察することを通して、綿密な記述を行いオリジナルな貢献をなしたと言える。

本論文は特に以下の点で、博士学位請求論文として学術的に評価できる。

論文審査の結果の要旨

- (1) 対象とした 14,188 例の用例は丁寧に分析されており、十分に信頼のできるデータとなっている。まず用例収集の技術的透明性が高い。特殊なソフトウェアやオンラインデータを用いず、簡素で再現性のある方法によって多量のデータを収集している。また、用例の質的分析の精度が高い。本研究は定量的研究ではあるが、計量の前段階として、すべての例文が十分に吟味されている。例文は丹念に読み込まれ、修飾語句と被修飾語句の関係や、被修飾語句の意味分類などの分析が全てが明示的な定義に基づいて丹念になされている。これらの質的分析は母語話者 2 名のチェックを受けている。
- (2) 先行研究において全く言及されたことのないいくつかの事実を、実証に基づいて明示的に記述することに成功している。従来の研究では、たとえば「い」と「な」の間の差異は、どの形容詞・連体詞語幹においても一定であることが前提とされ、「大きい／な」で言えることは「小さい／な」にも自動的に当てはめが可能と考えられてきた。本研究は、それぞれの語彙項目にはそれぞれの文法特性があることを明らかにした。また、主語助詞の「が」は形容詞語尾「い」、主語助詞の「の」は形容詞・連体詞語尾「な」との共起傾向が強いことや、被修飾名詞が漢語か和語かによって「い／な」の出現傾向が異なることも新しい発見である。これらの慣習的傾向を言語使用者の直感から導き出すことは不可能であり、研究成果は方法論に依存することを明らかに示している。
- (3) 文法的形式と社会言語学的なレジスター（言語使用域）の共起傾向を明示的に表示したこともこの論文の評価すべき点である。書き言葉と話し言葉といった二項対立ではなく、複数のレジスターにおいて段階的に使用の傾向が変わることを示したのは、言語使用の無意識的側面に注目する研究が昨今増えている中で、貴重な記述的データを提供できたと言える。
- (4) 「い」と「な」の使用が多数の要因に基づいて決定されることを明らかにしたあと、その理由を探るために、本研究は「オオキ」と「チイサ」について、通時的な言語変化の分析を行っている。「オオきな」は形容動詞の「オオキなる」に由来し、「チイさい」は形容詞の「チイサき」に由来する。「オオキい」と「チイサな」の語形は後で出現したものである。この歴史的变化の事実は国語学では常識であるが、日本語の共時的研究では考慮されてこなかった。国語学に日本語の歴史記述に多大な蓄積があるのに対し、日本語学では共時的観点が重視されてきたが、言語は社会的・歴史的構築物であることを考えると、ある時点の共時的言語状態の説明のために、歴史を取り入れることは望ましい方向である。

ただし、以下の点も付言する必要がある。

1. 多量の用例の質的な吟味が十分になされている一方、結果についての、日本語学および、一般言語学的な分析が十分になされているとは言えない。データ解析の結果を言語学においてすでに述べられている多量の言説と照らし合わせ、語彙、文法、言語規範、言語使用

論文審査の結果の要旨

域、言語変化などの問題に関する考察を深めることが期待される。

- データの数値的処理が不十分である。「い」と「な」の使用傾向に関して、有意な差異のある要因のみが取り扱われていることはグラフや数値から想像できるが、統計処理がなされていないために、読者に不安を与える結果になっている。また、「い」と「な」の使用の条件として複数の要因が発見されているが、要因間の関係についての統計分析がなされていないのが残念である。要因としての強度の差異や、統合が可能な要因がないかなどに関する検討が必要である。
- 「い」と「な」の使用に関して、複数の要因を発見し、歴史的な考察を加えるところまでで本論文は終了しているが、本質的な意味で「い」と「な」はなにが違うのかに答えることができていない。言語教育への応用の観点からは不十分な結論であると言え、これを補うためにはさらに研究を続けることが期待される。

しかし、これらの指摘は、今後の研究への課題であり、本論文の博士論文としての価値を損なうものではない。

3. 結論

以上の評価により、審査委員一同一致して、本論文は博士（学術）の学位に値するものであると判断し、論文審査の結果を可と判定した。